

三省錄

後編

三

9
3780
8



三省録後編

原義輯

住居之部



◎居宅ハ富貴なる人ハ分限より少く、狹きと云ゆるの理ハ
あり。然るに、（印）富貴時ありては、（印）春樹秋ハあり
て、（印）月十五夜とてかくるがごとく、（印）地の理皆あ
くれば、（印）今富貴より居所心よりあせ作り、（印）り
とも遠き慮を有れども、（印）後々修復れ力もなく、（印）破を損
浅き、（印）々々見ゆふそれなり。壮年のありて、（印）富貴身はあ
まり、（印）屋はくさるなり。破あり、（印）人ハ一生を乃ち、（印）を
まへ、（印）とありて、（印）老境膝を容る所もなく、（印）人々を
眼前幾許といふ数と云らば、（印）天道虧盈而益謙、（印）地道虧盈而



と召つて周防守下知しつゝいひくくおろがち仕廻り
公家武家をするふく災の根元といふより板倉の
ものらひひふくや此常世人も周防守が思ふより
いふなり誰一言是を告めふ人さありといふや 明君享保録
○同所代朝鮮人來朝登城前所櫓の白土落しを増上寺に
成り節に上覽還所前白土を付けせりや 松平伊豆守
信綱は被仰付け信綱承之外の所櫓此戸をさづけを立替て
由は當儀方のなりへ社中付の土井大炊頭さうひふ
豆州よりぬ作主より所大町へ不成るやとぬ
中津と志るやめされよりいふ事あるがうは急い
と社中付の然り所自分より音直なりといふを
と社中付の然り所自分より音直なりといふを

働も出は得ども外の者へ被仰付け時誰も此働は不足
久ハ不調法をせりやうは被里召しハ其人も立ぐといふ
社中より伊豆守の事と成りひ玉極威入は信綱
を某一生に心掛けよと社中より 柳營故諺記

○ちうさ頃青山故大徳亮殿ハ生乃質素なる人よりよめり
志る人のやうに思ふはひや或時外よりあふれ
役人どもをいふ誰彼れ宅へ参り玄園を思ふと
いふ自由もよく思ふは自分屋敷玄園ハこれ外
いふ通りひるげく思ふあり大工ども入用を
をいふ思ふやうにと社中付らるゝ役人とも常々
半金風を存しなりは分り直まつらせ金八兩まで出来

い中と書付居出やれと大膳殿はくくえらせりややく
望周といふは八あちやま子は八足極き人を援助す
るうそとて普請をやられしや然るに居城の最
大坂の市井出火つた江戸早退の使者を以て江邊中
此の時ある使者を目通り近くより出で膝の側は小粒
金を紙に包みおきて兩の金よりすくひて定めておき役人
とよりや付はん是ハ自分かやるぞとて其をぬき
袖へ自分入るの男も伏して退んとていひはる
と中はわいてまゝ兩金よりすくひ左の袖へおくられし
ある人同様は四すくひるよりい付ある人一人だけ
ある道中心をげりて江戸に住居を番はるる其後

○大膳亮殿系府の最規模なる上意も有るより具
不影玄關は置付の長持のとつある内は金千兩とて金
より入けりて銀より封巾もあく當番の廣間番代り合の
時分蓋をあけ見はるより受取たりる海より承
傳へ君上の心持は此所より心得て中へなるべし
となり 嚶鳴館遺草

○臣民家國の中は任申はてうと人々家内はするあやう
るも此は中実の家とせし誰れ彼れもた家も老後よりあ
しき家より極くは中実にして其家ハおのれ棟うりハ上道
具程かある戸障子屋派などハ中実を縁を居しつと土
臺廻りより中実は然るや如何なり上中下は道

材木よりくくも上屋根と申物なりて一日も雨露
の凌ぎハなりふ中仍て上中下れ材木ハたゞひひとむね
ききやさきとれ上材もくも上や祢が雨よりいふく云
村ともう朽腐里やひしく桓はゆりて戸係子ハ破れ換は
ても上や祢さへ丈夫よりハ其家は住めやれ然るゆゑ上
屋根をあるをけ丈夫よりいふくなくやぶきよりそよ
ぶきよりぬきよりいふくなくふさきよりいふく其
瓦も銅がらよりいふくなくも破れかた心づひもせき
いふく其ハこれ上屋根より中坐は家老人諸役人諸頭士
ハ上中下の諸道具より中坐は 同書

○魯嚴公桓宮の楹小彩色一楠彫物せんと匠師の慶と云

人云くもて君の先祖君ハよく儉約をたてなひく偽を
後人ハ法を遺しゆめ急よりく福を多しり然る
は今君偽をたてぬり君ハ益をたてなひく先祖の令
はたでもすいせあんといふめなるもあり 尚儉撮要

○靈王章華臺を造るに伍采と云ふ臣ともは登王を美む
るのなとほめられし伍采云くもて國は君より賢人
を重し氏を安んずるを樂とていふある人れを能く用
を以て能く遠きところの人をよきとくづくる故に
明とて其臺の高く樞の彩とり楠れふさきちて免る
を美とするといふを聞す今君は老を作て國民つるを困
千穀やふせ百友日づらハく國奉て是をたため数年

くするうち来る目よあわく見るとれいみふれども是民の
利をあつゑて以て自ら尅くく瘠民也故は是を美と幫ん
やと忠諫國語に見えり

○權現様駿府に被遊あそび坐まい菅野くさのふ倚たい砌板倉内搭か正ただ身み後ご社
倭やまととしと被依出よりい我小廟所わがこみうを將軍より被中付なかつはあてハ
始祖いそ社倭やまとをいばとの倭を以て定て作事しやくじホと結搦くわくはで中付なかつは
一ひとどそ又ハ世用の事ことよ小ホ子孫こそんは玉り代しろしろくとも始祖いそ社
廟みうに増まらぬやうある勸戒くわんかいのあめもろく百言ひやくごんを以
て怪あやまき室むろはより被立たはれとの上うへとあり下畧げりやく 神徳集

○鴨長明鴨のちやみん云一二所を伝つたりてある家とて七つをいいと思おもひ
あらハせる人々ひととてあまきくはわく身みれ地ちさふれとる

ハ一二百ひゃくにふたひゃくはすざれはあハみきく一ひとさうとさ人のあえこ
ろのあめさハ世よはすむ屋やさう馬うまのきりをははく
りせくハあらばやのよりまふりハオをさづりり
るをくる一ひとそ一日いちにち子こあらんあは村木むらぎをえらびむと
ぶつをらと玉たまうみとこのさあて何なんのせんハあるまれ
いめちあづまれはすむくさういばあハ他人たにんのすま
となりあるハ風ふうはやれるあくちぬいもんや一夜いちや火ひを
出できぬ時とき一ひと月のいとく片時かたときのあひづとまけむりと
なりぬるまや 幾心集

○見ハむう菅君くさぐん江戸へ入いりはうと整昌せいしょう一ひと家いえ居い多く出
来きりはれども皆みなさざうて焼や止やどちと一ひとおるよ長六ちやうろく

権現様八月朔日於小田原進發江戸に赴きぬ所々番城
偽局岡経堂あるを九月十日は御城に移り入るや支那の
族本は軍より小方より地歌其旁なきるありとて則ち城
北西北と内藤室左衛門天野清右衛門を以て地割あり一
岡北土を引下し谷を埋め不日は成就し多ゆえは則ち大
番府相頼は此時より御家より外の番はなくて大番衆より
里なり依之番所と名付る由舊通に軍ははや支所を多
かりし日本武の言は矢ハ魔をとり良財と名付せ
るとして嘗城は鬼門の方本々産を由る能の内と力同心
ホる多かりぬ由弓町と云次は之は八丁堀を御干潟は
堀除の堤を築て若糸の水を落しんぬあちより舟入は川

とを堀せ其土を以て地形と物所を差別付て其上桑石以
上は屋敷を多かりぬはたちち若糸堂系ハ堀島の真宅
と変ぬぬあちより(諸國は工高より)はるより来り桑石
霧れど霧のじ文王の御代もくやらんこれゆゑは
次才は五穀は桑も此は(地もふより)近在(持運ひ)置野城
ひらき田畠と一よりこれ武蔵野はれより作毛の地と
まてぬ五穀豊饒より氏其とるをほり山を八バツ
ほり土地を度げ家宅をいとなむ人もいたやすきな
り云 續武家閑談

○むり江戸大番請けと人此家居もいよご定すべ大名高
家此家取すうううあまなりある大名やきけうら

坊うけなる小屋うげなどして坊うなる夏のふらんふひせ
むきとくろは懼多くて排ふるふ 遺老物語

○西丸御厨能なりハ依久百將監よりある一由書清大より出来
一ちん

大猷院様御境のふあ出御あり將監御供け申はあやうな
るふりや大久保左衛門居合せられハ書清足すと依ひ
る様見一誠は結搦ある清大はゆり中て後將監よりを見や
りて解ハ甲は似きく元を堀とやらん其方がおれどくり御
局を中付はれ勿論此御城などハいしらぬとハいひながら
此作法ハすゝあるづきり此は略法などハ申れ立物すそ
縫きとせはとあげりふハきりうひの筆一やう雪隠など

と見ひりガ才一つふも這入のひいそがき時ハ具足無
き刀振ゆ一紐をうらうりはいるもれなりそれ
くある習するぞく用捨もなく云々ハバ 上様何と
思召れありん何れゆいりもなく桑へいらやれりあり
誰う付つゝや世れ人のうりりとす侍なり 同書
美云これを見れむう乃西丸御厨ハ今様のごとく度
大ハあらばりうすも左衛門のさハ大小よつきく
分限あるを協せりや

○台徳院様ハ茶道を由好いあそびせ小堀をいさるり照
尺なる此人當時ハ京通とてくはりようす持教ある
ども格あて決人此の本と茶多し多し御教ある屋も是江

義云此記を急買石見入道宗山といふ人の書なる明暦
火災此記なりはあつた東ある今此元所急津所なり
みる田畑耕地あり今此元と里八坪ある地ありて
人家軒をなりべしつとを連ひ立建地地あり市の中
あり武家地も昔々年此地代金十ある余を以て百坪を
借貸せふ整地あり田地を見るに數十所急井戸あり
よあゝとていつらけはば見ず是も後來数手此よりそ
ちよりくのうこれ地とあらん又云此今大はれ小屋
もちよと大なる家恒をもと持とをみるべし今此火
するやいふ地中より武家八坪と市中ととも杉板
板板里のくちあり境を居る板屋此よりけ出る

予て瞬息此なるなり謀は都下此住み難ありなり又云
此後今の方玉橋此例はよりあり一板焼死尸を舟
より本所へ送る毎日此なるなり夥しよりくは後と名
付て三途此後といひ内江戸あり見ゆと名

○松平伊豆守修徳殿此作里やうとせしと表の居る此
東は寝るを作里口と表へもあけぬとて一もあたらるは故
夜中此城より急用や来り付候中次はハ連て及ぶ故直に
居る其状持来里戸を敷きいより寝とあけり自分
出向是を披見すは為る寢るを来居る人引付て作ら
るすい病等の時表のくちあ切いて表の寝口明にハ表
と一ッは来て其用盡し早ぬは故に右此よりけ作りり被

致々る 續武家閑談

○高野大師の言は家ハ富貴ナリハ惡シ火災の害を不慮の
ひさく依る家ハ怒るナリ永くありとて東寺は
大師堂ハ甚だありひさくある故に久しく火災をすぬ
うけり云 栢窓漫筆後編

家云江戸下吾度迄此門を幾度の火災をすぬなり
々々向金く里讀も傳ふるありぬるもあは子細あ
るゝあらず他は此門よりひさく至て栢好ありやえゆ夫
ゆゑ火災を免るなり云

○連桐袋柵といふは今世ハ僧にて氏百も設くる家有り元來
連桐ハ月御雲窓の家は設けぬものありありて正當に入

あるれとて家の冠と上の柵は金烏帽子ハ下の柵は金
為は設くるそのや袋柵といふは多く上るさ
上るさこれをいふは柵にて金枝玉葉の止ん
所為はやうけらるる天子常此所調度ともを録れ
ふくろり入る 則ち紙入を置 それを天子入所の時所
付咒歌は裁り所ありある主役やう其袋を請取奉る
彼袋柵は入るるとなりゆゑ冠り烏帽子の柵より袋柵
ハ上にあるなり菊桜所能のとき南殿の階上は柵は所見二方
座中ハこれなりやうのやうに彼はさるなりと
ぞして是利家末は所を立られよう里公武隈に連桐
袋柵を束は武家やうにやうけらるよりつひは僧にて氏百

は設るこゝハ何るぞや袋棚ハ書画の油もれと白砂粒は相
信屋とあり連棚ハ糸のまらへる箱はなりは並々と里へり
東膳子

○鎌倉將軍家の屋敷造は宿角あり母屋廂中門廊中門侍遠付
などいふとそゝありあると云ふなり然れども室町家の
時より一變しつりす院といふれも古き出扱ハハんえす
玄園といふも途は下りしやと出束ありとまん今世は玄
冥といふハは古法中門侍するやと云ふる 小窓閑語
○玄園と云ハむハなり足利時代禪宗より玄妙は入る門と云
まゝてまゝなり古ハ玄園の上の廊下や下路子履きと
てありぬ近く東都と云ふあり 古老人の物語なりと

同けり今池上本門よりめはの古風あり 東海より
ゆ玄園は古実器易の袴ハ伊勢氏四季着はあり

○細川忠興ハ乃三宮陣小屋を所至より一層半は五層の小
屋と云ふ二跡ははくもやうはユズにて出来す柱ハ榎木と細
く一様を以て石突は志のけ折ぬやうはあり上も四方も
は桐油塗りあり在而ハ勿論東京江戸もありと云々 續武家閑談
けうも油断なき武將と云

○お平伊豆も婦子甲斐も源頼朝督あり 後ハ陣小屋地盤具
こゝら中へきむのあしへ下をせられし武功は諸物語
より著つたるハ総トゝ源氏あはれお清あとなり地盤は小
屋ハ冬用なるべしとやす源頼朝かきひて一通りハ花のりな

是とも此の地は他國と違ひの火火多きなり其外此上洛
日光寺來りしは傳に舊本の名に先當おれり常々大名
多く此傳せむ中ハ大なる時傳するべし其時當に下切
ある小屋を用ゐる時見分しるなり人爲なれば此は
とくの積をとり少く多く支度せしめし付る志なり
寛文のけし日光寺登山より新石宿の國ハ江井におれ
りられしと云ふは傳に麻疹をとりしつゝ此をせし
急に平受もは伝付らるるも今日明日と云ふなり
なれば此の交代晝夜の居ありしをきなり一甲受
するはこの用事ありし小屋をとりて速に持來りしゆ
えあるしつゝ小屋れあとしつゝ切細小屋を掛る

一々平日れ心かけし配せりと人々耳目をせし
一々り 明良洪範後編

○出家の輩もハ公儀より此沙汰も難ありしなり
分が一つして山城の洛中洛外よりても六十年以來
此大小をなりし一年れも此修理建立内中をとりて三
千貫目に入庫きこと中いふるはせえあるもハつても此と
分りて子費目二千貫目なりしつゝね年ハあるなり
るハ本款もの大佛に此室のなりし中振あるが此は
此のより大なるやうにハせしめども當年東山より新
りさへすしは此のなりし費目ハ入庫きこと中いふ
寺所内中より立しりも合て子費目ハ入庫きこと中いふ
寺此四中より立しりも合て子費目ハ入庫きこと中いふ

用をりりより三十万石餘此城下此士屋敷ハ不修修理
五十年ハ堅固あるやうなる處ハ山城此もよ
五子費目づハ毎年入つたり此つを以て江戸大坂
諸国の多少をならし一年此堂舎の入用より二十ヶ
此士屋敷ハ堅固あるといふことよりハ國よりより
いふ年よりハ天下此町人百姓迷惑人の家のくらず修理
なるべし右ハはよりよきものがつたりてやは是日影
費のこれよりよりある年より五六十ヶ百天下
をとりくづしハ日本のはりよりいふも五六十ヶ此
よりいふと表は仕るたより其外の費ハた有道の世
よりハたよりあるよりよりいふよりより

火きえんとて光すすむく佛者此算衆極て亡ふ時
至里傳ま吉利支丹の由穿鑿出来て佛者の奢いや
よりなり僧來りて大寺多建のゆぬ君臣とも仁君
忠臣より由由いふも此一の乗除此理をあきらめ
いふハ世の中ははくづきやうハたむむく大道心
此僧ありて佛法再興の法をてんをよきと
いふや或は見えたり五百多此ハ佛者此心より
をぬくゆえ人あきと見え

集義外書

○或時岡崎の由城下矢利の橋水よりいふ
神君被仰付吏より付すより宗老中彼より上なるハ
存案此よりいふもヶ根の折なりをいふより
存案此よりいふもヶ根の折なりをいふより

は左様なりまれば不斗に此様棄てられし旨にあら
せられしあり此様城のせよき一つ此様ぞ仰ら
せたる 同書

○享保十三申年三月七日社印出の觸書

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 一 番町 | 一 糶町 | 一 元山王 |
| 一 永富町 | 一 小川町 | 一 猿樂町 |
| 一 駿河堂 | 一 飯田町 | |

右屋敷より作敷焼きといふ修復すハ新親より番付仕
いづ向後業ぶきお仕百あり 武家秘要集

系云是ハ過年人家も建込りて火災の多めとて社印令
せよ其ころ茅ぶきハ勿論り屋敷有りと見ふ

屋敷ハ右の場所ハみる新益金銀のつらうとなりて
下社末より一年より多く令たりともいふ屋敷と
なるるありあきまきとて裏傍も一泊あり

○上より下はあり一富町の町人紀伊屋敷文左衛門と云も

社あり一上社中堂は普請請負より敷業此金とそふけて
棄てふよりききこれゆえとて目を附てならハ一松元禄
十三年此夏評定所へ出て預いなるハ只々ハ御用結る
中病者若生してハ湯仕交候中なる伊豆守大さとい
アと町人此分として上を煙むる奴うな湯治結給ひ
ちいハ我亦祖与力う家来どもやとておとそ給ふと
なり然るより應く公用結評定の席へ預ひ出るやとハ大

孫源を市邦孝が家より火災被りて是は其父の著述の書
ともを庫に入置置る火災の時庫は火にいらんとせし
て其書ともを焚焼二つは納め一冊はたり置てす火災
といふ所をて出れんと用て置てり一が自家より
火出て彼書とも残らず焼失せり惜むべし予も書を信
置て其書焼よりきまれば自家の火災をておそひりけ
り一が家より自家の火災をて置てり一とぞり 舳舻訓

○大猷公此の時其の在事所より出火し其本丸を上す時
女中西丸へ移りしよりふとき豆砂下知りたる八幡馬の内
馬のうらとて一丈と道とぞり止まりてより中渡り
くれは案内者よりて女中道をすめりあり 續武家閑談

○旅行此時を有つてきりて方角を置きし案内お
よび閑所のあてきりてよく見届て休息すべくかくせ
けき不時其強動失火木の時うらあるもの之 小窓閑記
系云都下惣算の地は居住する者多し祝駈の足多し右三
條表跡は若きよりうらす人々多し是は其地あるを
殊にあらはし記す

○明暦四年の年所城回祿よりとも酒井官所をて存家より
先格のおとく作て出れる此所城を本にあらはれりて
作らる時ハ稲倉殿は若きより所屬本を送らせ其後
公方家と稱せりよりより車寄殿上の百上檀所は産り
法角かけある是は本ハ室所殿の若きよりてはくすなり

大廣習松林間ホハ伏見此所城の櫓は作らるゝ実修の玄堂
久植あどハ強倉此古風を跡しつくり改められお其外
兼治年中彰造の所屬中も此度むう一法よくはくられ
とちつろく此矢倉多門ありてあり只橋をとり石
垣を提のくく天守のたさむかり明暦以前よりハのちり
諸大名此門あり弱くやくよく柵をぶくよこの中へ入るも
はるの郊外ありすゝ無量此費とくハ修止ありける
改正武野
燭談

○會津肥後も正之江戸芝此下屋敷は海上をうけく高をつく
られける中此侍安西ハ左衛門と云老父筆もなく武居
一片此男ありられ正之のまが祠を用ひられけるある日

勤番此時此庭を見せける國はあらはる海此肥後源の満
予をうけくはくられける安西一切をめやけのびなむく
もあるやと多づひらくとき然らば存より中上屋敷は築
山植込此風流は多く此を費され害をあつめて多れは
る此為よハより此おちるハ江戸何れぞくやて兵衛やで
もたり此普請を傳其外上洛もくも會津より人数り
よせられ此小屋植込つくりよたまききや急は築山植
込にせられをりふづきやといふは中ややありたり
無量のまもとをくたるとてありく掃庭よりてある 同書

○松平伊豆守信濃が老中の時ハ世智弁ある所はくおなくそ
ふまれありなれども大器ハ人れ志るとつたり或時天

守の壁毎度風雨より多き此と此は修治此是代を志する
むるむづうき見て伊豆であらう此は下壁より白土を
用いよ修ても見ざる一ありと申付らるす所之志
のびく一此鉄釘を此便金式分とは服治のこれ中
を同ていふは市城れるやあれそそ大れあひひのか奈良
物とく下これ此は服差は境も少練るもれあれを
釘より内用に向は然るべ一腰の代る正はるす是をうハ
アと用いよと申付て釘のあひ引さげらる 同書

○秋元但馬守喬朝あるとき水道此極あな換するは付て法
人も難儀一まは内物入なれば永代くらばるやうは仕
あるべ一と相談ありは鉄かき筆出ていふなり

まりをくらばらば此むうのど毒ありて用いづ一
焼物此極をふてくらばくらば一永之の利便なるべ一
と内談一但馬守も中々るは但馬守もはるハ瓦此鉄ハ地
震はあれくけく二つて此造作むづ一かるべ一厚さ七
寸の本を以てあり一らへるらば百年ハ朽づらばる年と
一度改めらる人ハ何れ内物入といふべき本は厚く黒く
ちある常本を用らる人ハ亦て此換るべ一地此底は
と念入らるべ一瓦樋等用ありとやは生る其年大地震
一くるはすく一破壊すく一但馬守は奈良を人ど
一威一々 同書

義云諸役の錢るころハ里謗は云一文也一此百換る

或古老はいつを火志づかりし早く戸をひらくと日乃
戸を開くはと早ふれ内は火の多き火事發してや
なるなりとあり火難らハす外より水をかけ火事を止ま
す後戸をひらくとありといひ予按ずるは風上はむ
うひる戸口をやくひらく時に風ふきいそぐあつ
る下風下れ戸口をひらきても難るるべしといづれ戸
をひらくぬ前は外より水をかけ火事を止ますべしといふ
東武は春月ハより火災やす南風乾能火を起す連
日吹と云ハハより火災を起る處此地は宮なるも此
にほあるべきなり 延元祚さめ草

○此然乎云今此内裡はく里出れく有職の人は見せられ

くるりいつもあつとて己は遷幸の日近くなりくるは玄
輝門院内院に因院殿に拂形穴ハ丸くてふちもなり
そぞあていと仰られくるいふかりなり此處をえられ
いつく木をてふちとしたりなれハあやまりてなるさ
まよなり云いふもく大内は造堂ハなるはら古代の所
なりと云ふぬすを質素と云ふなり（すれすあり）
も飾をなすを素飾の基ハなれかく仰ありと云
○美おふりむう解家大臣ハ家の門はと水と蓋舟
木鉤數十を並て火災ハ為し備ふなり日本記に見たり
蓋舟ハ今水溜す木鉤數十といふ今水溜す口ハ
となすべしはらざる口を火災ハ用りするふるきなり

○ 寺なりん前より下るに磐井の地は住みんよりをま
つ防火に用定肝要あり土蔵にせしより防火才一は此と
なれども竊者のたやそく建つべきは且をすまへれ
穴など見落しあれを却て大なる過となり救ふべきた
のよりするぬちともあり予はもと東台の小千坪余れ別
荘は住居にせばそれ空曠は所は木部屋を立て家の遺著
中へハ土蔵板など入きて此方の用定しやうが々ハ東台の
南麓に移居して人衆建ぬをば外は用定の構へもふら
ず中へ土蔵も破れぬれば出づちていゝおるよりして
の造定して小屋の中は一石余れ貯べき尤大なる瓶をも
とめあれを土中へ埋め置るは板敷の上へ其上へ板屋

○ 根を蓋ひて天水を防ぎやうの外はそれはおろしきんを
またき鉄鉢焼芋釜を買ひてめて湯を水鉢とて湯
用とたし北窓は時ハ右に瓶中へ家著すこをきこれ湯を
どなげいして右に鉄つをとするはれは家族も湯を
くちの外の外へ入るをせめて五十老翁の湯を七ツ程
とたやすく入るなり近火のときあれをぬき見
ていゝとるやうすこれハ竊者の土蔵ともいへば
ハ土蔵は執心源一婦女子を衣服は執心源一志のれを
もつて七坪並に土蔵よりあつて土蔵ある床裏
へ増らんぬとも將き用定ゆえなりぬ

○ 頼室の内隠居に作す繩うらけをぬり此磐井より下るハ

死を志するを達人とす六十はあやうき子のものなりとを
するを自分を志しつづるなり身と志しつづて人を志する
とあるづりつづと云なり 紀州頼宣卿言行録

○大河内金吾末を相平伊豆守実父なり金兵衛質素ある人
て其より小才なりし玄因はよりなりやと大の千石なり
れ流しはよりいふと金吾末三石なり上より寄附とい
ふはよりなりありとのや尚世を直系二百石三百石
の流しなり及ぶと力中士町より七醫師よりを流し
は用閑の町人よりきりすめより七頭取よりを流し
玄因はよりと見えたり 額波集

○薩州國分城門がやぶきよりあられありとより破損い

そより付山田利安伊集院抱善龍伯様(中)あられられ
城門破損仕はるは常修護れはひより小板ぶきよ
仕中より他國より使者をよりより二ヶ國の大名
ははるは城門よりやぶきよりあられありといふ
とやられは龍伯様おせきより使者を遣はし
らずありあるものをはよりより尤當國此地を數里
通りよりよりいふよりバニケは大名は城門がやぶき
より氣おられも國民の風俗を見いへ富よりえある大
名は仁政はよりあつたれあると肝要れとあり
よある事をはけりより小板ぶき結構よりありといふ
民百姓はより國主は仕立よりよりよりと見えたり

千桑のころは事を治けやぐいりばるゝより事をつ
ちやぶぐいそくはかやふきゝくゝるゝゝるやうに
伯はと有り 薩州舊傳集

○池田輝政卿姫路に城を住みしとき居る竹筒水志びく
損くゝるゆゑは有司ともいふ世上にて水筒を銅を治く
るはと流しやハ一度ありえいべいつまぐも損せぬ故
は儉約しむるべしとをいふをそれ方ともいふゝゝゝ
はそれといひて後れありゝゝなるべしれども今夢を
ある竹とハ大に相違あるべしゝゝゝゝも世よつてゝるき
をあらゝゝむるをよゝらぬあらゝゝゝとおふゝゝゝゝその
儀やゝぬ 思出草

○備前出雲郡中野は烈公の遊覧の地あり夏日暑を避くや
とそまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
を牧せむ公れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
赤岸は花畠とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
公候をあらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
古は聖人の地ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
烈公遺事

以常也作事をしむ諸事丁寧は取法くらひいふと相
なりすあれよりそはひえをまざるあつたつなり
むい金く忠務様後来の衆とせえられ儉約質素此
いふめと後世のまはれい衆をありてくま存いり
酒井空印

言行録

○青山幸利公尼崎初入此常山城本丸より馬より下
させらる本丸此中橋をいりてきふは生山城入あそそ
はをいりそは後山用金此穿鑿はれいとある永樂の
銀鈔一袋をらてハ此産あくいり此役人ども申あけい
ハそれゆゑよきいりく儉約のまげりよりて本丸
よりハいりせらる二の丸は此堂なされいハ諸事此質素

は出入なされいそのうち雪隠へ銀をいり置る此堂はとあ
るを毎日此閑暇ハ此あひあそははは雨天の常を竹の
子笠りて此あひそはは夜分ハ懐燭をいり置てなはれ
お油火よりて此自らは此もちるは此通ひあそはは
よりあより此あひゆえ此年寄中いづれもいり申あ
けいハ此承引なははは初年ハのやうは此堂はより
一説り此初より三度よりて此在城のやうはあそはは
よりとあり 青天録

○板倉周防も様京都より此系府に生あり此城より此下里此
常下系は此老中様より此系も此城よりてあはあり周
防も様此系も此包よりあはあり古びいを酒井忠勝様此見

